

被災地を結ぶ、伝える活動

伝承ロード 縁

町の歴史と複合災害の経験伝える とみおかアーカイブ・ ミュージアム

一般財団法人3・11伝承ロード推進機構
代表理事の今村文彦先生

七ヶ浜町立向洋中学校

伝承ロードをゆく 第7回
宮城県仙台市青葉区・宮城野区・若林区・
七ヶ浜町・多賀城市・塩竈市

陸前高田市

いわき市アンモナイトセンター

道の駅「おながわ」

NEWS & TOPICS

vol.14~vol.17の「縁」



町の歴史と複合災害の経験伝える

とみおかアーカイブ・ミュージアム

富岡町の地域の歴史や特徴を伝えるとともに、町の運命を変えた東
日本大震災と原発事故の経験を後世に継承することを目的に、2021
年7月に開館しました。25年8月には来館者が10万人を突破。原発立地
自治体の職員も視察に訪れるなど、全国から見学者が足を運んでいま
す。3月7日より、震災から15年を振り返る企画展が開催されます。

震災・原発事故関連のほか地域の文化や歴史についても知ることができる「とみおかアーカイブ・ミュージアム」

東京電力福島第一原子力発
電所事故の影響で、一時全町
避難を余儀なくされた富岡町。
2019年より順次避難指示
が解除され、現在は町民約
1万6千人のうち、2700
人余りが町に居住します。

同館は、地域住民や来館者
の交流の場でもあり情報発信
を行うタウンギャラリー、地
域の歴史と震災・原発事故に
ついて伝える展示室の他、約
5万点にのぼる資料を保存す
る収蔵エリアに分かれていま
す。

震災と原発事故後、町では
建物の解体が進められ多くの
場所での元の姿が失われました。
展示資料の多くはそのような
解体された家屋などから運び
出されたもの。

これらは福島大学の協力を
得て整理作業が行われてきま
した。16年3月には「震災遺産
保全宣言」が行われ、町として
震災遺産を保全し地域の経験
を継承していく姿勢が示され
ました。

被災パトカーを展示

同館では「複合災害を地域の
歴史に位置付ける」ことを目標
に掲げ、地域で長い時間をか
けて積み重ねられてきた日常
が、突然奪われた事実を町民
目線で伝えます。

導入部分のシアターでは3
つのプログラムを上映。町民
をはじめ、復旧・復興事業に
携わる人々の証言映像などを
見ることができます。

常設展示室では、町内から

出土した土器などの地域資料
から、原発事故による避難生
活を記した町民の日記といっ
た震災遺産まで約430点を
紹介。展示室の中央には避難
誘導中に命を落とした、2
人の警察官が乗っていたパト
カーが展示されています。

また新たに館内にて、NPO
法人「富岡町3・11を語る会」
主催の「語り人アワー」を定期
的に開催。町民が自らの被災
体験を語るほか、地元の富岡
中学校とふたば未来学園高校
の生徒らによる、震災を題材
にした紙芝居の披露なども行
われ、教訓を若い世代へとつ
なぐ場にもなっています。

開館は午前9時～午後5時
(入館は午後4時半まで)。入
館無料。休館は月曜(祝日の場
合は開館し翌平日休館)と年末
年始。



民家に残された地域資料を収集

とみおかアーカイブ・ミュージアム副館長の三瓶さん

「当館は震災伝承施設であるとともに町の歴史を紹介する博物館としての役目も担っています」と話すのはとみおかアーカイブ・ミュージアム副館長で考古学を専門とする三瓶秀文さん。

富岡町出身の三瓶さんは、富岡町教育委員会の職員で、町内にあった歴史民俗資料館で学芸員をしていた時、震災に遭いました。「3月11日の夕方に災害対策本部が設置され、

「原発が危ない」ということで12日未明には全町避難が決まりました」と振り返ります。

三瓶さん自らハンドルを握り避難所となった川内村までバスで町民を輸送。「普段30分ほどで着く距離が渋滞で3時間余りかかった。その時点で

は誰もが「すぐ家へ帰れるだろう」と思っていました」と振り返ります。町民の思いとは裏腹に4月22日には町全域が警戒区域に指定され、町民は避難

生活を送ることになりました。

そんな中で三瓶さんの頭をよぎったのは町に残された文化財の存在。「故郷を離れることになった町民の心のよりどころになるかもしれない」と考えるようになりました。

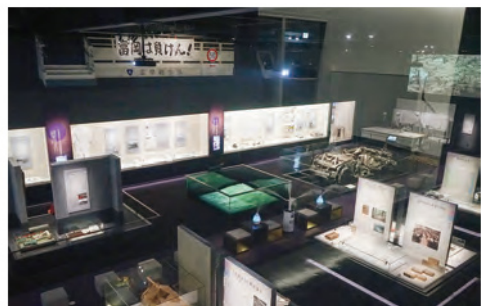
震災から約1年後、福島県被災文化財等救援本部が立ち上がり資料の搬出が行われることに。14年6月からは、「富岡町歴史・文化等保存プロジェクトチーム」が始動。民家に残された震災前の日常を捉えた写真や地域の記録などを収集してきました。

歴史の一部として

展示室には町から出土した化石や土器、帰還困難区域の空き家から運び出した生活道具などが数々の震災遺産と共にワンフロアに展示されています。

「震災と原発事故も町の歴史の一部として取り上げているのが当館の大きな特徴です。「自分たちが住んでいる地域で

2階の収蔵エリアからは展示室の全体が見渡せる。上部に掲示してある「富岡は負けん」と書かれた横断幕は町民が国道6号の歩道橋に掲げたもの



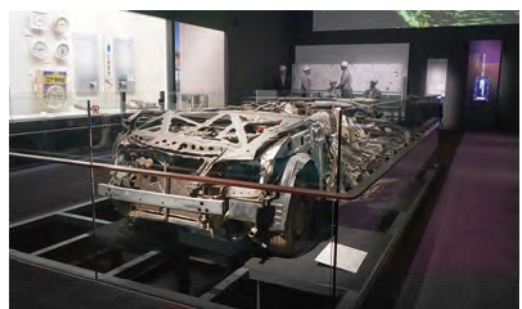
富岡のような複合災害が起きたら「そう考えることでこれらの向き合い方が変わるかもしれない」と話します。

館内には三瓶さんも対応に当たった災害対策本部の部屋を再現した展示もあります。刻一刻と変わる状況を走り書きしたホワイトボードや書類が散乱したテーブルからは当時の緊迫した状況が伝わってきます。

展示の最後「複合災害の現実」のコーナーでは、避難先のホテルで子どもが書いた手記や、町に取り残されたペットや家畜のことなど、複合災害の現実を生々しく伝える資料を展示しています。

「町民の住宅支援や展示資料

2人の警察官が乗車し自らの命をかけて町民の誘導にあたった被災パトカー



の保全活動などに携わってきたこの15年間は本当にあつたという間でした」と三瓶さん。昨年の大阪・関西万博では福島県の復興展示ブースに参加。富岡町で被災したパトカーの部品を持ち込みました。

「震災を過去のことと捉えている人も多くこのまま風化していくのでは」という危機感を感じました。震災当時を知らない世代が増えていく中、記憶や教訓をいかに引き継いでいくかが課題です。富岡を襲った未曾有の複合災害の現実とそこからどのように立ち上がってきたか展示を通して今後も伝え続けていきます」と三瓶さんは力を込めます。



戦後から昭和40年代の写真を元に商店街の風景を再現したジオラマの前に立つ三瓶さん

思いを
「発信」

震災伝承施設の連携が大切

一般財団法人3・11伝承ロード推進機構代表理事の今村文彦先生

東日本大震災から15年を迎えました。この間、目に見える復興は進みましたが、今もなお心の傷が癒えない被災者が多く、ソフト面のケアなどが課題として残されています。また、大きな地震もたびたび発生し、津波警報や注意報、昨年末には「北海道・三陸沖後発地震注意情報」が初めて発表されました。一般財団法人3・11伝承ロード推進機構代表理事で東北大学長の今村文彦先生に、15年を振り返るとともに未来に伝えるべき、残していくべきものは何か、話を聞きました。

今村先生は東北大学大学院工学研究科教授(津波工学)などを経て、震災後の2012年に開設された同大災害科学国際研究所教授となり14年から23年まで第2代所長を歴任しました。

震災とその後15年について



「震災を知らない世代に、どのように伝えていかも今後の課題」と語る今村先生

「広域で国内最大級の被害原発事故も加わったことで甚大な社会災害になったとあらためて実感します」と今村先生。「目に見える復興は一段落しましたが、心のケアやコミュニケーションの創出、震災伝承の在り方などソフト面の課題が残っていたり、見え始めたりしています」と話します。

被災地の各地には震災伝承施設が開設され、案内員の配置や語り部活動を行うなど来館者の見学しやすさに配慮した「第3分類」の施設だけでも現在、70余りを数えます。震災から10年を過ぎた頃から語り部の高齢化や施設同士の連携といった新たな課題が出てきました。

今村先生は「震災伝承という一つのテーマに沿った施設が広域にわたり点在しているのは世界的にも類を見ない。ただし施設単独では情報のアップデートがしづらいし、それぞれの特徴や役割を活か

して分担し、連携を図られるようにすることが大切」と強調します。

時の経過とともに震災を知らない世代が増えていきます。

「若者はもちろん、外国人にも伝わる手法を整備しないとけない。震災伝承施設は交流の場でもあり、それぞれの地域ならではの触れ合いを図れるような取り組みで地元住民にもなじみのある施設を目指してもらえれば」と今村先生。究極には「四国の八十八カ所お遍路参りみたいにならなくてもいいようにするためにも一層のネットワーク化が重要」と指摘します。

避難行動が二極化

震災後も大きな地震がたびたび発生しています。昨年7月にロシア・カムチャツカ半島沖を震源とする巨大地震があり、太平洋岸は北海道から近畿まで津波警報が発表さ

れました。12月には青森県東方沖地震があり、青森県八戸市で最大震度6強、太平洋岸の北海道から岩手まで津波警報、宮城と福島は同注意報が発表されました。

住民の避難行動など、震災の教訓は生かされたのでしょうか。

今村先生は「生かし切れていないと言わざるを得ない。災害に対する備えや避難行動の二極化が進んでおり、きちんと対応している人もいれば甘く見ている、震災を忘れてしまったような人もいます。人間は忘れる動物なので、忘却を前提としながら、いかに防災の大切さを確認していくかに尽きます」と語ります。

青森県東方沖地震では「北海道・三陸沖後発地震注意情報」が初めて発表されました。震災の時も2日前に大きな地震と津波(注意報)があり、「あの時、後発地震に備えていたら、あれだけの被害にはならなかったと思う」と^{しじく}忸怩たる思いと振り返ります。

「震災伝承の大きなテーマは防災。多様な人が折に触れて交流することで課題が見えたり、解決に向けた糸口が見えたりします。そのステージとして震災伝承施設が果たす役割はとて

も大きい」と期待を寄せます。

灯ろう作って震災を考える

七ヶ浜町立向洋中学校

東日本大震災の津波被害が大きかった宮城県七ヶ浜町にある向洋中学校の生徒会執行部と、同校の卒業生らによる伝承団体「きずなFプロジェクト」が震災伝承のワークショップを共同企画。震災後に生まれた中学1、2年生が防災グッズにもインテリアにもなるLED灯ろう作り挑戦。灯ろうは3月11日に町内で点灯されます。

震災から15年の祈念企画で、2026年1月に向洋中学校で「放課後ワークショップ」が初開催されました。1、2年生約40人が参加。きずなFプロジェクトのメンバー、町内で伝承事業に取り組み「地球小屋」のスタッフからアドバイスを受け、生徒たちは灯ろうのカバーを作りました。

自由な発想で、A3サイズの台紙に切り絵やイラストでデザイン。
制作した灯ろうは町内の「みんなの家」で3月11日まで開催される「七ヶ浜町震災の記憶展」に並び、最終日の夕方に点灯されます。

卒業生と在校生が企画

きずなFプロジェクト代表の伊藤葵亜梨さんは「灯ろう作りは震災を直接伝えるものではないですが、15年の節目に向洋中生が震災を考えるきっかけになればと思い恩師に相談しました」と打ち明けます。共同での企画が決まり、



1時間という限られた中、制作に集中する生徒たち

放課後ワークショップに参加した生徒やきずなFプロジェクトのメンバーら

生徒会執行部は校内に告知を掲示するなど熱心に宣伝。予想を上回る数の参加者に、副生徒会長長の2年佐野柊真さんは「こんなに多くの生徒が集まってくれて良かったです」と笑顔を見せます。

生徒会長長の2年引地陸斗さんは「両親から、津波で自宅が流されて避難所生活をしていたと聞きました。授業で公助の大切さを学んだので、災害時は助け合いたい」と、改めて震災に向き合います。

伊藤さんは小学2年生の時に被災。しばらく震災の話題を控える環境で育ちましたが、中学1年生の時に受けた授業をきっかけに震災を伝える大切さを考えるようになりました。18年3月に向洋中の卒業生15人できずなFプロジェクトを立ち上げ、伝承活動を続けています。伊藤さんは「随時新メンバーを募集しているのでも、向洋中生にも参加してもらえたら」と願います。

向洋中では全学年で防災教育があり、25年度はきずなFプロジェクトや地域の語り部による震災の講話等を行いました。震災伝承のワークショップは初の試みで、26年度以降の実施を前向きに検討中です。

3・11伝承ロード推進機構 震災伝承施設紀行

伝承ロードをゆく

第7回 宮城県仙台市青葉区・宮城野区・

若林区・七ヶ浜町・多賀城市・塩竈市

取材／一般財団法人3・11伝承ロード推進機構 業務執行理事 原田吉信



「くしの歯作戦」を紹介する東北地方整備局展示コーナーのパネル

「震災伝承施設」とは？

東日本大震災の事実や記憶、経験を伝承する「3・11伝承ロード」を構成する施設で①震災の教訓が理解できるもの、②震災時の防災に貢献できるもの、③震災の恐怖や自然の畏怖を理解できるもの、④災害における歴史的・学術的価値があるもの、⑤その他、のいずれか1つ以上に該当することが条件。①～⑤1つ以上の条件を満たす施設を「第1分類」、加えて公共交通機関等の利便性が高かったり、近隣に駐車場があったりと、来訪者が訪問しやすい環境にある施設を「第2分類」、さらに案内員が配置されていたり、語り部活動が行われたりといった来訪者の理解しやすさに配慮している施設を「第3分類」としています。

一般財団法人3・11伝承ロード推進機構の職員が東日本大震災の教訓・伝承を後世に伝える「3・11伝承ロード」をたどり、震災伝承施設を取材する連載企画の7回目。今回は仙台市青葉区・宮城野区・若林区・七ヶ浜町・多賀城市・塩竈市を訪ねます。

震災伝承施設の今

福島県いわき市を出発し、北上してきた本連載の行程も前回で宮城県仙台市に至った。折しも今号は、東日本大震災から満15年を迎える3月11日発行の節目号となる。ここで3・11伝承ロードを構成する「震災伝承施設」について、その実情や課題、対策を確認しておきたい。

伺ったのは、3・11伝承ロードの活動を推進する「震災伝承ネットワーク協議会」事務局の東北地方整備局。協議会は青森・岩手・宮城・福島4県と仙台市、国土交通省東北地方整備局、復興庁で構成されている。東日本大震災の経験が

ら得られた個々の実情と教訓を総体として広く国内外、次世代に継承し、地域の交流促進、地方創生、地域の防災力の強化に寄与するため、震災に関する震災遺構、震災復興伝承館、記念碑や慰霊碑などを震災伝承施設として登録している。

「教訓が、いのちを救う」をコンセプトに、登録施設をネットワーク化し、教訓と伝承を風化させることなく後生に伝える「3・11伝承ロード」を形成。防災に関する「学び」や「備え」を国内外に発信してきた。

取材にご協力いただいた熱海裕章震災伝承推進官によると、2019年3月に192件から始まった施設の登録は、25年12月に347件に上る。

これら震災伝承施設の情報には、統一ピクトグラムによる道路標識やマップ、パンフレット、オンラインで案内しているほか、パネル展などイベントを通して発信。官民協働で研修やツアーを行ったり、施設管理者が情報を共有するための「震災伝承施設交流会議」を開いたり、ネットワークを活用した、さまざまな活動

東日本大震災から15年
深化を目指す「伝承ロード」



- 1 仙台合同庁舎B棟1階行政情報プラザ内
東北地方整備局展示コーナー
宮城県仙台市青葉区本町3-3-1 仙台合同庁舎B棟
問/東北地方整備局企画部企画課
TEL022-225-2171
- 2 二日町庁舎跡地 記念石碑
宮城県仙台市青葉区二日町9-15地先
問/東北地方整備局企画部企画課
TEL022-225-2171
- 3 新浜みんなの家
宮城県仙台市宮城野区岡田字浜通54-2
問/仙台市宮城野区まちづくり推進課
TEL022-291-2157
- 4 藤塚地区地域モニュメント
宮城県仙台市若林区藤塚字屋敷47
問/仙台市若林区まちづくり推進課
TEL022-282-1111
- 5 3.11東日本大震災伝承板 - 菖蒲田海岸防潮堤-
宮城県宮城郡七ヶ浜町菖蒲田浜地内
問/宮城県土木部防災砂防課 TEL022-211-3175
- 6 多賀城市東日本大震災モニュメント
多賀城市中央2-7 多賀城駅前公園内
問/多賀城市総務部総務課秘書室
TEL022-368-2039
- 7 塩竈市東日本大震災モニュメント
宮城県塩竈市海岸通196-4
問/塩竈市総務部総務人事課 TEL022-355-5007

- 1 気仙沼市で被災した道路パトロールカーなど実物資料も展示。東北地方整備局では、これ以外にも被災した標識などを保管して「ぼうさいこくたい」など県外イベントで紹介しているという
- 2 タッチパネルで当時の写真も見ることができる
- 3 あいにくの雨の中、熱海震災伝承推進官とともに「二日町庁舎跡地 記念石碑」を見学



「国・県による継続的な支援と、担い手の育成・活動の仕組みづくりが急務です。今は『NIPPON防災資産』やSNSを活用して震災伝承活動の情報発信を強化。若者が関わりやすい震災伝承活動の場づくりを目指し、新たな交流を創出するため、道の駅、かわまちづくりのような既存施設との連携、東北復興ツーリズムや教育旅行の普及などにも取り組んでいきます」と熱海震災伝承推進官。

「2026年春に完成する福

に取り組んできた。一方で、広報費の工面をはじめとする財政面や、担い手不足など人材面、活動の持続性といった課題を抱える伝承施設は少なくないという。

「国・県による継続的な支援と、担い手の育成・活動の仕組みづくりが急務です。今は『NIPPON防災資産』やSNSを活用して震災伝承活動の情報発信を強化。若者が関わりやすい震災伝承活動の場づくりを目指し、新たな交流を創出するため、道の駅、かわまちづくりのような既存施設との連携、東北復興ツーリズムや教育旅行の普及などにも取り組んでいきます」と熱海震災伝承推進官。

救援の道拓いた作戦

東北地方整備局のある仙台合同庁舎の1階「東北地方整備局展示コーナー」に、熱海震災伝承推進官に案内されていた。

東日本大震災が起こった3月11日当日の整備局長の直筆メモや、損傷した「津波浸水想定区域」標識などの展示を通して、復旧・復興で東北地方整備局が果たした役割、震災伝承や防災の重要性を紹介しており、震災伝承施設第2分類的（宮城第2001号・地図1）に登録されている。

東北自動車道と国道4号から津波で被災した沿岸部へ続く何本もの国道を、救命・救援ルート確保に向けて切り開いた「くしの歯作戦」を紹介するパネルも展示の一つ。

がれきを処理し、段差をならし、2日間で11ルートを確認した、この作戦の拠点になったのが、2015年に現在の場所に移転する以前まで東北地方整備局のあった二日町庁舎だ。

あいにくの雨の中、本町の庁舎から傘を差して約10分。晩翠通り歩道の植樹樹の中に、震災伝承施設第一分類（宮城第1008号・地図2）となる記念碑が立つ。

熱海震災伝承推進官によると、次世代の災害対応力を高めるため、震災当時の経験や教訓は研修や講演などを通して折に触れて東北地方整備局の若い職員らにも共有され続け、その後の災害対応に生かされているという。



仮設住宅の施設を移築

続いて震災で津波の甚大な被害を受けた仙台湾岸エリアへ。震災伝承施設第1分類「新浜みんなの家」(宮城 第1-0010号・地図3)を訪ねた。「せんだいメディアテーク」の設計で知られる建築家の伊東豊雄さんが、仙台市宮城野区福田町南一丁目公園の仮設住宅の住民たちと構想を練り、熊本県の「くまもとアートポリス」の支援で完成させた集会施設。仙台の第1号を皮切りに、建築家たちが手がけた集会施設「みんなの家」が釜石市や陸前高田市、東松島市など東北の被災地各地に建てられ、経験を活かして2016年の熊本地震の際は熊本県内に約100棟造られた。



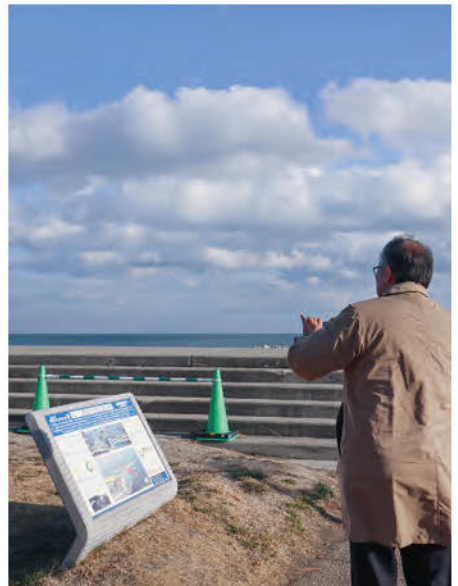
④ ティーなどを備え、地域の活動拠点として活用されている「新浜みんなの家」
 ⑤ 施設内にボタニを飾らないなど、建物の特徴の白壁が分かるように配慮。お茶飲み会
 「新浜みんなのカフェ」開催時には看板を設置している
 ⑥ 震災前に148あった新浜地区の世帯数は震災後72軒に。新浜みんなの家は他の地区からゲストを招く、交流の拠点にもなっています」と教えてくれた平山さん

新浜、堀切などの住民が同居していた仙台市宮城野区福田町南一丁目公園の仮設住宅で、自治会長を務めていた平山一男さんによると「癒やしになるような集会所を作りたい」という、伊東さんたちからの申し出に対し、生活の立て直しに必死だった住民の方々は当初、反対の声もあったという。

それでも「一人暮らしの高齢者が孤立することなく過ごせるアットホームな場に」「靴を脱がずに入れる土間と小上がりを」「ストーブがあると良い」といった平山さんたちの声を反映させた集会所が完成すると、住民たちがストーブを囲んで談笑したり、仕事帰りにお茶やお酒を飲んだりと気兼ねなく立ち寄れる憩いの場として愛された。

「『みんなの家』のおかげで横のつながりのなかった仮設住宅で孤立を防ぐことができ、新浜、堀切などの住人たちも仲良くなることができました」と平山さんは振り返る。

仙台市は仮設住宅の解体後、2017年4月に現地再建を果たした宮城野区岡田新浜地区に「新浜みんなの家」として移築。白壁など、建築の特徴を生かすとともに熊本県から



シーズン中は海水浴客でにぎわう菖蒲田海水浴場のすぐ近くに立つ「3.11東日本大震災伝承板-菖蒲田海岸防潮堤」。伝承板越しにビーチが広がる

の支援と縁に感謝し施設内に熊本県PRマスコットキャラクター「くまモン」のインテリアを飾って、震災で行方不明になった方々が家族の元に戻ることを願う「かえりびな」や「つるしびな」のイベント、月1回の「みんなのカフェ」をはじめ地域の活動の拠点として大切に

活用し続けている。新浜地区には川俣正さんらアーティスト、建築家らが手がけた個性豊かな「小屋」も点在している。現在はこれらの小屋や「みんなの家」を案内する「貞山運河小屋めぐり」といった企画も行われ、新浜町内会の平山さんや遠藤源一郎さんがガイドとして地域の魅力を発信。震災当時や、震災前の地区の様子、仮設住宅での暮らしなどについて伝える場にもなっている。

震災伝承のモニュメント

仙台から塩竈にかけての仙塩エリアには「二日町庁舎跡地記念石碑」以外にも震災伝承施設として登録された、多くの震災伝承のモニュメントがある。一部をたどってみた。

若林区藤塚地区にある第1



地区の特徴や震災の概要、震災前の藤塚地区の暮らしの様子を写真とともに紹介する「藤塚地区地域モニュメント」



⑦多賀城駅からも車道からもよく見える駅前公園に立つ「多賀城市東日本大震災モニュメント」
 ⑧2012年7月に当時の市長が当初「慰霊碑」として建設の意向を表明、翌3月11日に除幕式が行われるなど塩竈市東日本大震災モニュメントの制作・設置はスムーズに行われたという
 ⑨全国からの復旧復興支援に感謝し、モニュメントの緑石に塩竈市に職員を長期派遣してくれた32の自治体名を刻んでいる



分類「藤塚地区地域モニュメント（宮城 第1-0005号・地図4）」は水鳥とともに、カラー写真が配置された目を引くデザイン。地域の被害の状況だけでなく、若林区藤塚地区の地名の由来や歴史、震災前に98世帯が暮らしていたという集団移転前の地域の様子が記録されているのが印象的だ。

七ヶ浜町の菖蒲田海水浴場パトロールセンターのすぐ近くにある第2分類「3・11東日本大震災伝承板1菖蒲田海岸防潮堤」（宮城第2-016号・地図5）」にも立ち寄る。宮城県と七ヶ浜町内の被害状況とともに国内3番目に開設された歴史ある海水浴場であるという菖蒲田浜の歴史、震災後の復旧復興の歩みが紹介され、菖蒲田浜の防潮堤の役割も学

ぶことができる。

さらに足を延ばして仙台市と七ヶ浜町の隣、多賀城市の第2分類「多賀城市東日本大震災モニュメント」（宮城第2-010号・地図6）へ。

多賀城で最も人の行きかう駅前にも市内の被害状況や津波浸水区域図、多賀城市の「減災都市宣言」の文言などを紹介する表示板とともに立てられている。

モニュメントのデザインについての解説もあり、それによると、多賀城市の最大津波高と同じ高さで作られた円筒形の部分は多賀城碑覆屋がモチーフ。格子が形作る四角は震災で犠牲になった方々と同数の188個になっているという。

日常の場で記憶伝える

最後に、塩竈市海岸通りにある震災伝承施設第2分類「塩竈市東日本大震災震災モニュメント」（宮城第2-017号・地図7）を塩竈市総務課長補佐兼係長に案内していただいた。

震災の教訓を風化させず、復興を祈念し犠牲となった市民の慰霊のために建立されたというこのモニュメントは、太平洋の日の出をイメージし

た「日の出石」と、復興の象徴「昇る太陽」をデザインした4本の石塔が印象的だ。石塔に津波の高さ、日の出石には市民公募で決定した「自然の力を心に刻み 未来を見つめ 塩竈に生きる」のメッセージと、震災で亡くなった市内65人の犠牲者のうち、遺族の了承を得た46人の名前が刻まれている。

モニュメントの設置場所として選ばれた千賀の浦緑地は、海から近く大型商業施設も隣接する、仙台と松島を結ぶ国道45号沿い。志波彦神社・鹽竈神社の境内からも見下ろすことができ、多くの人たちの目に触れる場所だ。日常の中で、記憶と教訓を想起できる場になっているようだ。

毎年3月11日にはモニュメント前に献花所が設置され、多くの市民が訪れている。

三陸沿岸道路へ

次回から三陸沿岸道路のエリアへの旅が始まる。

東日本大震災による被害の規模や犠牲も大きく震災伝承施設も多くなる。それぞれに刻まれた言葉と思いを伝えていく一層の重責を感じながら、次の担当者にバトンタッチする。

被災乗り越え
まちづくり

教育・研究の振興に注力

陸前高田市

陸前高田市の被害状況

最大震度	震度6弱 (推定)
浸水面積	13km ²
最大浸水深	17.6m
建物全壊	3807棟
建物半壊	240棟
建物一部損壊	3988棟
死者	1560人
行方不明者	201人 (うち死亡届 け提出199人)
負傷者	不明
※2026年1月現在	

岩手県南東部に位置する陸前高田市は太平洋に面し、

広田湾に注ぐ気仙川、氷上山ひかみさんをはじめとした山々を有する自然豊かな市。東日本大震災では中心市街地が津波により甚大な被害を受けました。復興事業ではハード面の整備が完了し、震災伝承に取り組みながら、教育・研究の振興に力を入れるなど、新たな町づくりを進めています。



お話を伺った方
佐々木 拓市長

東日本大震災では海側の市中心部の津波被害が大きく、住宅、公共・宿泊・商業といった主要施設が壊滅。美しい高田松原を形成していた松林の約7万本の松の木々が流されました。甚大な被害により、防潮堤整備、高台への防災集団移転、中心市街地の再生といった大規模な事業に着手。こうしたハード面の整備は、2025年5月に岩手県指定有形文化財「旧吉田家住宅主屋」の復旧を終えて完了しました。

東日本大震災の津波に耐え、たった1本だけ残った松の木は「奇跡の一本松」として、岩手県立高田松原津波復興祈念公園に保存されています

ライトを設置。学生が市民の声を直接聞きながら、地域が抱えている課題の解決を図るためのワークショップなどを行っています。

同年12月には中央大学と包括連携協定を締結しました。27年4月に開設を予定している学部の新設取り組みとして、陸前高田市で農業に関するフィールドワーク等をはじめ、町づくりや地域の活性化、生涯学習、学生の地域活動への参加、産官学(民間企業や団体・自治体・学術機関)の連携、教育、文化、スポーツ、人材育成など、幅広い分野の連携が検討されています。

震災を伝え続ける

市内には「東日本大震災津波伝承館」「奇跡の一本松」を含む「高田松原津波復興祈念公園」など震災伝承施設が数多くあります。「今後とも、甚大な被害を受けた自治体として、想定

にとられない避難行動の重要性や初動対応、地域コミュニティの支え合いの力、命を守るための実践的な行動、自然の脅威、災害に備える社会の在り方、復興の歩みの課題などを発信していきます。震災を経験していない世代がますます増えていく中で、次世代を担う子どもたちの未来のため、その事実と教訓を伝え続ける重要な役割を担っていると、思います」と強調します。

震災の記憶や教訓を受け継ぎながら、次世代が住みたい、訪れたいと思える町づくりを推進。プロ野球チームのイースタンリーグ公式戦やプロサッカーチームによるサッカー教室の開催など、スポーツを通じた交流で地域の活性化につなげています。

毎年12月に開催している「奇跡の一本松マラソン」は、多くのランナーが奇跡の一本松や津波の脅威を伝える震災遺構の付近、中心市街地などを走行。震災からの復興の歩みやまちの魅力を感じただけでなく、陸前高田市を応援する想いを共有するイベントであり、復興に取り組み続ける陸前高田を広く発信しながら交流人口の拡大を図っています。



米国クレセントシティ市との交流



高田高にデルノートの生徒が来校

震災による津波で、岩手県立高田高等学校海洋システム科の実習船「かもめ」が、クレセントシティ市の海岸に漂着したことがきっかけで交流が始まりました。

クレセントシティ市のデルノート高校の生徒が実習船を発見。募金活動で集めた資金を活用して、実習船は2013年に陸前高田市に返還されました。これを機に両校の生徒は行き来を始め、17年に国際姉妹校提携を締結。以後、県の補助も受けながら高田高生のデルノート高への短期留学を行い、友好の絆を強めてきました。高田高生が国際的な感覚を養い、将来の進路を考えるきっかけになることを期待しています。



日本の音楽を通して交流

さらに18年に、陸前高田市とクレセントシティ市およびデルノート郡との姉妹都市協定を締結。相互に市民を派遣し、まちぐるみの交流も継続しています。

旧吉田家住宅主屋の復旧



復旧が完了した旧吉田家住宅主屋

旧吉田家住宅主屋は江戸時代に仙台藩気仙郡の24カ村を治めていた大肝入の執務所で、1802年建築の趣ある茅葺きの建物でした。主屋敷地内にあった土蔵、味噌蔵、納屋（長屋）とともに、周辺の町並みと合わせて江戸時代の地方の歴史や文化を知ることができる貴重な財産として、岩手県指定有形文化財になっていました。

震災による津波で全壊し部材は流失しましたが、直後に吉田家当主と地域住民が奔走し全部材の約6割を回収。設計図がない中、被災部材を使用した木材建築物の復旧という一大事業に着手。歴史的価値を残したまま2025年3月に完成し、市のハード面の復旧事業は完了しました。



震災による津波で流出した主屋の屋根部分(写真提供/岩手県立博物館)

仙台藩における気仙郡の重要性を改めて見直すことができる貴重な文化財。25年5月に一般公開し、市の魅力の発信につなげます。

中央大学と 包括連携協定を締結



大学などの教育機関との連携で地域活性につなげる事業の一環で、2025年12月に陸前高田市と中央大学が包括連携協定を締結。中央大学の学生が陸前高田をフィールドに、農業や漁業の実習を行う予定です。

岩手県立高田松原 津波復興祈念公園



国、県、市が連携して2021年に全面供用を開始。国営追悼・祈念施設、道の駅高田松原、東日本大震災津波伝承館などで構成され、現在では震災伝承の中核を担い、三陸へのゲートウェイとして観光面の機能も備えています。

ツール・ド・三陸



復興支援と震災の記憶を伝えることを目的に、2012年に始まった自転車イベント。陸前高田市と大船渡市の沿岸地域を舞台に複数のコースが設定され、変わりゆく町の景色を眺めながら自転車で巡ります。

化石の産出地を見学 本格的な発掘体験も

いわき市アンモナイトセンター

1992年に開館した「いわき市アンモナイトセンター」は、化石の産出する地層をそのまま建物で覆った国内初の施設です。ハンマーとタガネを使い、化石を発掘する体験ができることから、関東地方からの来館も多く、太古の地球の息吹を間近で感じられる場として親しまれています。

いわき市街から車で約40分の「いわき市アンモナイトセンター」は、楡葉町から同市四倉にかけて南北15キロに分布する白亜紀の地層、双葉層群の上に立地します。

施設のある場所は元々は農地で、畑を耕す際にアンモナイトや貝の化石が多数見つかったことから、いわき市がこの土地を取得。実際の化石産出地を建物で覆った国内で初めての施設です。

本物の化石を間近で見ることができただけでなく、土日曜には隣接する露頭で本格的な発掘体験ができます。世



約700平方メートルの広さがある露頭観察ゾーン。約8900万年前のアンモナイトや貝類化石を地層に埋もれたままの状態で見学できます

界でも産出数が少ないアンモナイト「ヤベイセラス」といった、希少な化石を来館者が発見することも珍しくありません。東日本大震災では施設に直接的な被害はほとんどありませんでしたが、同館が所在するいわき市大久町を含む地域に、福島第一原発事故に伴う屋内退避指示が出されたことから、約4カ月にわたり休館。2011年の来館者は例年の3割ほどに落ち込みました

海外からの来館も

同館の研究員で博士(理学)の歌川史哲さんは東京都出身。筑波大学で古生物学を専攻し、2018年4月に入職しました。幼い頃、親に連れられて同館を訪れたことがあり、就職が決まったときは縁を感じたそうです。現在は発掘体験のナビゲートや産出化石の調査・研究の他、イベントの企画・運営などに携わります。

「関東地方や宮城県など来館者の半数以上は県外から。近年はアジアやアメリカからのインバウンド客もいます。化石発掘にのめり込み「神奈川県からいわき市へ移住した」と言う方もいて驚きました」と話します。

同館では学校向けの体験学習を実施していて、地元久之浜地区の小・中学生が年1回、郷土の地質や古生物を学



館内に入ると直径約1メートルほどの巨大なアンモナイトが出迎えてくれます

が、徐々に回復し、22年には累計入館者数50万人を達成しました。

びに訪れるほか、県外の学校が「いわき震災伝承みらい館」や富岡町の「東京電力廃炉資料館」といった伝承施設の見学と併せて訪れるケースもあるそうです。

「発掘体験をきっかけに子どもたちが古生物の分野に興味を持つてもらえたらうれしいですね。皆さんの来館をお待ちしています」と笑顔で話します。



第3分類(訪問しやすく、案内員の配置や語り部活動など、来訪者の理解のしやすさに配慮した施設)、第2分類(公共交通機関等の利便性が高い、近隣に有料または無料の駐車場があるなど、来訪者が訪問しやすい施設)のみ紹介。

第3分類

- アクアマリンふくしま いわき市小名浜字辰巳町50
- いわき市ライブいわきミュージアム「3.11いわきの東日本大震災展」いわき市小名浜字辰巳町43-1
- いわき市地域防災交流センター 久之浜・大久ふれあい館 いわき市久之浜町久之浜字中町32
- いわき震災伝承みらい館 いわき市薄磯3-11



女川駅から港の方向に望んだ道の駅「おながわ」の全景。「レンガみち」はいざというとき高台を目指す明確な避難路にもなります

事業再建と交流の場 に商店街組織に向け一手

道の駅「おながわ」

JR女川駅と女川港を結ぶエリアに広がる商店街が道の駅「おながわ」です。元々は復興商店街「シーバルピア女川」としてスタート。後に「レンガみち」の周辺施設も加わるなどして、エリア全体が道の駅として登録されました。町内の事業者の事業再建の場はもちろん、観光土産の拠点施設、新たな交流の場として大きな役割を果たしています。

リアス海岸の深い入り江にある女川港の周辺に町の中心部が形成された女川町は、東日本大震災で壊滅的な被害を受けました。水産業をはじめとする各種産業も0からのスタートとなり、中でも町民の暮らしを守る商業の復活は事業者の経営再建の面からも喫緊の課題となりました。

仮設商店街は2011年12月に工事が始まり、「きぼうのかね商店街」として12年4月に女川高校校庭にオープン。がれきの中から発見された旧女川駅舎前にあった、からくり

時計の鐘をシンボルに、町の復興を願って命名されました。

女川駅までのJR石巻線全線運行再開に合わせ、15年3月に女川町が「まちびらき」を宣言。その年の12月にシーバルピア女川がオープンしました。運営会社「女川みらい創造」社長で道の駅「おながわ」駅長でもある阿部喜英さんは「被災

事業者の再建のみならず新規の受け皿も目指しました。当初、国が想定していた支援策は被災事業者のみに限られていましたが、女川から国へ働きかけ、被災していない事業者も入居が可能となるよう、制度を拡充してもらいました」と振り返ります。



「時代に応じた変化を常に追求していきたく」と意気込む阿部さん



女川の海の幸がそろう「ハマテラス」の店内

既存施設が道の駅に

シーバルピア女川は「レンガみち」に接するテナント型の商業施設で、現在はさまざまな業種の28店が出店。16年12月には「海」をコンセプトに、港町女川ならではの旬の海鮮などが楽しめる飲食店や鮮魚、水産加工品を販売する「ハマテラス」が誕生し、現在は8店舗が出店します。

震災から10年を迎える前には「やがて復興商店街としてメディアは取り上げなくなる。どうやって継続させていくかが課題と思いましたが」と阿部さん。

施設には道の駅に必要な設備があらかたそろっていることに着目。21年4月には既存施設の登録としては珍しい道の駅となりました。折しも新型コロナウイルスが流行し来客が減少しましたが、新規出店もあり新たな集客につながっています。

阿部さんは「空き店舗が出たときは弊社の営業活動の他、

女川町・いわき市の震災伝承施設

第2分類

- はなはなプロジェクト 浪分樓第14号 女川町女川1-1-1
- 東日本大震災遺構(旧女川交番) 女川町海岸通り1
- 津波記憶石第28号 女川町鷲神浜堀切山107-1
- 女川いのちの広場(東日本大震災伝承モニュメント) 女川町黄金3-10

女川町

町の起業・創業プログラムの参加者に声をかけるなど取り組みを進めています」と語ります。25年4月に女川水産業体験館「あがいんステーション」、女川駅併設の「女川温泉ゆぼっば」も道の駅エリアに加わりました。「町の復興スローガン『あたらしいスタートが世界一生まれる町へ』を体現できる施設を目指していきたい」と阿部さんは張り切ります。



所在地/宮城県女川町女川2-66
TEL0225-24-8118

一般財団法人3.11伝承ロード推進機構

NEWS & TOPICS

地域の防災力の向上と被災地の地域振興を目指し、東日本大震災などの災害の経験や記憶を教訓として語り継ぎ、情報発信するさまざまな活動に取り組んでいます。2025年2月～11月の主な取り組みを紹介します。

『「NIPPON防災資産」の 深化を考える会』に参加

2月21日に国営東京臨海公園広域防災公園「そなエリア」で『「NIPPON防災資産」の深化を考える会』が行われ、当会の認知度向上、教訓の伝承や備える動機・行動につなげる課題について意見交換しました。当機構から原田業務執行理事が参加し「災害時の行動に結びつけるため、教訓をできる限り分かりやすく伝え、理解してもらうことが必要」と述べました。



優良認定を受けた11事業者が参加

「仙台防災未来フォーラム 2025」にブースを出展

3月8日に仙台国際センターで「仙台防災未来フォーラム2025」が開かれました。当機構も「教訓は、いのちを救う。」をテーマにブース展示で参加。事業内容や震災伝承施設の紹介などを行いました。来場者からは「イラストマップが分かりやすく良い」といった声をいただきました。当日は約5300人の来場があり、家族連れも多く見られました。



ブース展示の様子

『「震災伝承施設」 深化の会』を開催

被災地外に住む人にも災害を自分事として考えてもらうため、8月30日に東京臨海広域防災公園「そなエリア東京」で『「震災伝承施設」深化の会』を開きました。会場に約100人、オンラインに約90人の参加をいただき、各伝承施設の活動を紹介しました。参加者から「記憶の風化を防ぎ後世に伝える取り組みがよく分かった」といった声が寄せられました。



伝承施設による発表

25年度「事業懇談会」 取り組みを紹介

11月17日に賛助会員と寄付者を対象に「事業懇談会」を開催しました。来賓として国土交通省東北地方整備局企画部長（代理：武田震災対策調整官）をお招きし、24年度の事業に加え、東日本大震災に関するWEBアンケートの結果報告や台湾教育関係者招請事業といった25年度の主な取り組みを説明し意見交換を行いました。



賛助会員と寄付者が意見を交換

台湾の台南市・高雄市の高校を対象に 震災伝承施設の説明会を実施

当機構では日本への教育旅行の促進と東日本大震災の震災伝承施設を防災教育に活用してもらう観点から、2020年度より台湾に向けたプロモーション事業に取り組んでいます。このほど高級中等以下学校国際教育交流聯盟CEOで國立臺南家齊高級中等學校の陳校長の働きかけで、台南市・高雄市にある18校の校長先生をはじめ、教育旅行を担当する先生に向けた説明会を行いました。当機構の原田業務執行理事より、震災伝承施設の特徴やみどころ、意義や価値について説明した後、25年5月に日本に招請した國立臺南第一高級中学の廖校長から、実際に見学した震災伝承施設の防災上の教育的価値や東北への教育旅行の意義などについて体験報告をしていただきました。



台湾で行われた説明会の様子

vol.14~vol.17の「縁」

一般財団法人3.11伝承ロード推進機構は、人から人へ伝える「縁」を大切にしながら震災被災地のさまざまな伝承活動を紹介しています。2025年3月11日発行機関誌「伝承ロード 縁」vol.14から同12月11日発行vol.17までに取材にご協力いただいたスポット、団体、伝承活動に取り組む皆さまに心より感謝申し上げます。



- 1 (vol.15) …忘れてはならない「記憶」津波記憶石第29号
- 2 (vol.16) …震災の教訓、次の災害に備える 青森県八戸市
- 3 (vol.16) …野田ICそばに移転 道の駅のだばあぶる
- 4 (vol.15) …普代村の海産物を販売 浜の産直きらうみ
- 5 (vol.16) …多角的に防災、減災を考える 宮古市災害資料伝承館
- 6 (vol.17) …生徒主体の自主防災組織始動 金石市立金石東中学校
- 7 (vol.16) …人と人のつながり大切に活動 一般社団法人邑(ゆう)サポート
- 8 (vol.16) …津波に耐えた“長寿”の木 ど根性ポプラ
- 9 (vol.14) …挑戦と成長を続け、常に進化 岩手県大船渡市
- 10 (vol.15) …供養通じて心の復興願う 海岸山普門寺
- 11 (vol.17) …庭園にともる優しい灯り 気仙大工左官伝承館
- 12 (vol.14) …天へ昇る姿は復興の象徴 岩手崎龍の松
- 13 (vol.16) …「買い物難民」をつくらない 南三陸ハマレ歌津
- 14 (vol.14) …台湾の若者が被災地で研修 南三陸町国際交流協会
- 15 (vol.14) …自然と共生、風光明媚(めいび)な場 海の見える命の森
- 16 (vol.14) …さまざまな自然体験の場に 三陸復興観光コンシェルジュセンター
- 17 (vol.17) …「最大被災地」からの復興 宮城県石巻市
- 18 (vol.15) …新聞社ならではの視点で伝承 石巻ニューゼ
- 19 (vol.14) …三陸道に新たな拠点 道の駅東松島
- 20 (vol.17) …私財投じ、1人で避難所を整備 佐藤山(おさとうやま)
- 21 (vol.16) …地域の強い絆 現在も なかの伝承の丘・蒲生なかの郷愁館
- 22 (vol.17) …“つなぐ使命”を学ぶ スマートイノベーションギャラリー
- 23 (vol.14) …震災伝承施設の紹介本を作成 仙台二華中学校・高等学校
- 24 (vol.14) …風船に、思いをはせて HOPE FOR project
- 25 (vol.17) …被災地域の交流拠点に 東六郷コミュニティ広場
- 26 (vol.17) …被害の実情と教訓を学ぶ場 名取市震災復興伝承館
- 27 (vol.17) …「反省がないと教訓を残せない」一般社団法人ふらむ名取
- 28 (vol.16) …未来の誰かのために 関上中学校遺族会慰霊碑・関上の記憶
- 29 (vol.16) …経験者と教訓を共有 仙台空港
- 30 (vol.15) …地区の記憶を未来へ いわぬまひつじ村
- 31 (vol.15) …駅隣接の伝承施設 亶理町立郷土資料館
- 32 (vol.16) …新校舎 震災復興のシンボル 山元町立山下第二小学校
- 33 (vol.14) …記憶と感謝を後世へ 埴浜(らちはま)防災緑地
- 34 (vol.14) …震災乗り越えた足跡を語る (株)広栄土木
- 35 (vol.15) …新聞づくりで震災と向き合う 福島県立相馬高等学校出版局
- 36 (vol.14) …「備え」の大切さを発信 相馬市防災備蓄倉庫
- 37 (vol.15) …全村避難からの復興 いいたて村の道の駅までい館
- 38 (vol.14) …維持管理の輪が拡大 南相馬市メモリアルパーク
- 39 (vol.16) …経験を後世に伝える「震災遺産」 福島県立博物館
- 40 (vol.17) …町の歴史を知り未来を創造 大地とまちのタイムライン
- 41 (vol.17) …岬から望む海 今も変わらず みるーる天神
- 42 (vol.15) …震災と原発事故の教訓生かす 福島県広野町
- 43 (vol.15) …津波の脅威から地域住民を守る
いわき市地域防災交流センター久之浜・大久ふれあい館
- 44 (vol.15) …震災体験 次世代に語り伝える いわき語り部の会
- 45 (vol.17) …被災状況映像交え紹介 アクアマリンふくしま

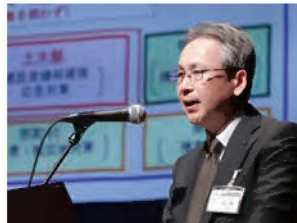
バックナンバーは
こちらから

「令和7年度防災・伝承セミナー in福島」を開催しました

福島市のキョウワグループ・テルサホール「FTホール」で2月4日、「令和7年度防災・伝承セミナーin福島」を開催しました。このセミナーは2020年度から毎年実施しています。今回は「災害時における建設業の活動を振り返る」をテーマに基調講演や活動報告、パネルディスカッションを行い、約200人が参加しました。

① 基調講演

福島県土木部長の矢澤敏幸氏から、東日本大震災と原子力災害からの復興の歩みについての講演がありました。発災直後の道路啓開や応急対策、建設業が果たした役割の大きさ、そして復興を支えてきた多くの現場の力が語られました。最後に、今後も災害に強い地域づくりと建設業の重要性を伝えていくことの大切さを示されました。



矢澤敏幸福島県土木部長

② 活動報告

当機構の原田吉信業務執行理事が活動報告を行い、震災当時の建設業者の献身的な対応を記録・発信する映像アーカイブ事業を紹介しました。発災直後、危険を顧みず、道路啓開、がれき撤去、物資輸送、人命救助に当たった建設業者の「現場の声」を映像で後世に残す取り組みです。記憶を映像=記録として残し、次世代へ伝承していく重要性が改めて共有されました。



活動報告では映像アーカイブ事業を紹介

③ パネルディスカッション

日本大工学部教授の岩城一郎氏がコーディネーターを、パネリストは福島県土木企画課長の中村一彦氏、(株)佐久間組代表取締役の佐久間哲男氏、石川建設工業(株)専務執行役の石川幸慶氏、福浜大一建設(株)執行役員土木部長の秋山隆氏の4人が務めました。震災を直接知らない若い世代が増える中、建設業の魅力や意義が伝わりにくくなっているという課題が共有されました。災害は一つとして同じものではなく、現場で瞬時に判断し行動する力はAIや技術だけでは代替できないという指摘が印象的でした。今後は建設業が「縁の下の力持ち」だけでなく、国民に向けて積極的に発信し、次世代の担い手につなげていく必要性が示されました。



活発に意見交換したパネルディスカッション

こちらで配信中です



第1回からの動画はこちら



表紙

被災地を歩く



未来へつなぐ思い 碑に表現

山元町東日本大震災慰霊碑「大地の塔」(宮城県山元町)

宮城県沿岸部の最南端に位置する山元町は東日本大震災で町域の4割近くに当たる約24平方キロが津波で浸水。死者は637人、家屋の全壊2217棟(うち流失1013棟)、大規模半壊534棟を数え、特に海岸線から1キロの範囲は家屋の大半が流失し、多数の犠牲者を出した。

花釜地区の旧JR山下駅跡地には、犠牲者を追悼するとともに震災の記憶を後世に伝えることを目的に、山元町が2017年3月、東日本大震災慰霊碑「大地の塔」を建立した。第2分類の震災伝承施設でもある。

大地の塔は「慰霊」「復興」「記憶」「願い」というそれぞれの思いが竹の地下茎のように大きく伸長し、大地から成長していく様子をイメージしている。塔の高さは震災の日を表す3.11m。毎年

3月11日午後2時46分には、大地の塔の影が刻銘板に埋め込まれている「水晶」に重なり、震災の記憶の継承を表現している。

慰霊碑には山元町を襲った津波の被害概要が刻まれ、震災前後の衛星写真なども掲示しており、慰霊のみならず震災伝承の面からも大きな役割を果たしている。

地元住民グループが花壇の植栽を行い、四季折々の花が慰霊碑の一带を彩り、震災の悲しみと伝承の決意とともに心の安らぎを与えてくれる。



所在地
宮城県山元町山寺字頭無125-6